

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

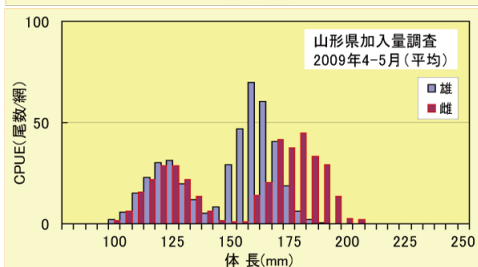
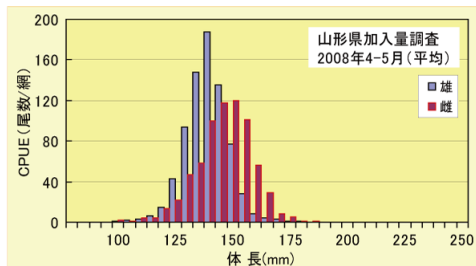
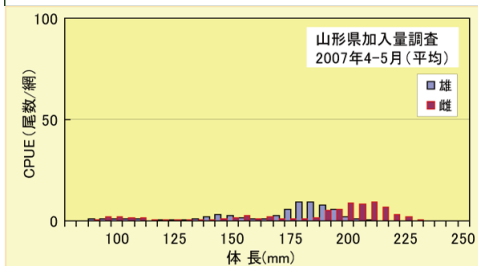
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、秋田県での産卵が多い
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: 大型魚類によって捕食されるが、詳細は不明

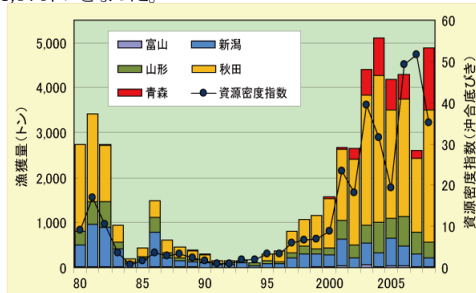
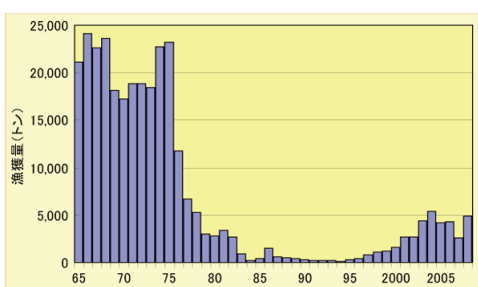


漁業の特徴

日本海北部のハタハタは秋田県での漁獲が多く、産卵・接岸期を対象とした定置網と刺し網(沿岸漁)による漁獲割合が大きい。また、ほぼ全域において小型底びき網や沖合底びき網によって漁獲される。

漁獲の動向

当海域におけるハタハタの漁獲は1965～1975年には20,000トン前後の高い水準にあったが、1976年以降激減し、1991年には158トンにまで落ち込んだ。秋田県は3年間の採捕禁止(1992～1995年)を実施し、その後も青森～新潟の各県では自主的・公的な漁獲規制を実施している。このような措置の下で、近年は増加傾向にある。2007年は2,601トンであったが、2008年は2歳魚の漁獲が多く、4,876トンとなった。



資源評価法

漁獲量の推移とともに、沖合底びき網漁業漁獲成績報告書に基づく漁場別漁獲統計を解析し、1980年以降の資源密度指数*の推移を調べた。加えて、青森県、秋田県、山形県および新潟県の市場調査及び加入量調査における体長組成から、近年の漁獲物の年齢構成と加入状況を考察した。

*資源密度指数:10分マス目で設定された漁区ごとの月別CPUE(漁獲重量(kg)／ひき網回数)を一定期間(年または月)、ある海域内(中海区または小海区)で集計した値を有漁漁区数で除したもの。

資源状態

近年の全般的な漁獲動向と各年級の豊度等から、1990年代前半に比べて明らかな回復を示している。2007年の漁獲量は、年末の沿岸漁では魚体が小さかったために漁が大幅に自粛され、前年の6割程度に減少したが、2008年には、豊度の高い2006年級により増加し、4,876トンとなった。資源は引き続き中位水準で横ばい傾向にあると判断した。



管理方策

漁獲量は、2007年に減少したが、2006年級に支えられ2008年は増加し、平均的には2003年以降中位水準を維持した。本系群は、2歳から4歳半まで漁獲される。2010年は、漁獲の主体となるはずの3歳魚(2007年級)は低調であるが、上半期に4歳魚(2006年級)、下半期に2歳魚(2008年級)を少なからず漁獲できる。2010年の漁獲量は、2008年のように多くはないが程度なら見込めると考えられる。現状の漁獲圧を維持しつつ、本資源を有効に利用するべきである。

	2010年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	3,700トン	1.0Cave2-yr	—	—
ABCtarget	3,000トン	0.8・1.0Cave2-yr	—	—

- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 漁獲量は、漁獲に関する自主的・公的規制のもとで増加してきた
- 大きな年変動はあるものの、2003年以降中位水準を維持し、横ばい傾向にある
- 2010年の上半期は2006年級(4歳魚)が、下半期は2008年級(2歳魚)が少なからず漁獲される

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧を維持しつつ、資源動向を見守るべき
- 2006年級を有効に利用することが重要
- 水産庁では2003年7月に「資源回復計画」を作成

平成21年10月26日更新

資源評価は毎年更新されます。